

コンテンポラリーダンス作品の創作過程における反省的実践についての研究 ―振付師とダンサーの相互作用による動きの質の変化に関して

趙穎妍（京都女子大学大学院）
大橋奈希左（京都女子大学）

1. はじめに

ダンスの創作から発表までのプロセスの中で、創作者（振付師・指導者）と踊り手（ダンサー・ダンス学習者）が異なる場合、柴（2018）によれば「創作者と踊り手のコミュニケーション」に属し、「作品の意図や踊り方などを両者が共有できるように動きと言葉で確認」するのである。筆者は、自身の振付の仕事の中で、作品のテーマを決め、動きをユニゾンに揃えた後、テーマのイメージを理解させるような創作方法を用いた事例が多かった。しかし、ダンサーはテーマについて頭では理解できても、作品の表す感情を心で捉えられず、身体で表現しようとしてもできなかった。

そこで、従来の筆者の振付過程と比較しながら、ダンサーに作品のテーマを理解させるより有効的な方法を探ることを目指していく。本研究の目的は、振付師とダンサーのやりとりを相互関係として捉え、動きの対極的な質を共有することの重要性について論じ、身体の変質が変化していることを、実践事例に基づいて明かにすることである。

2. 準参与観察（本研究者のポジションナリティ）

以下図1に本研究の位置付けと筆者のポジションナリティを示す。

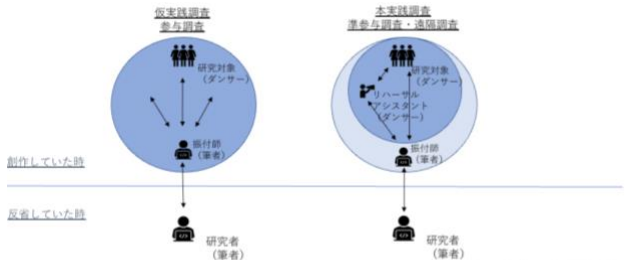


図1 仮・本実践調査/参与・準参与調査 ©2015 中島洋を基に筆者が改作

ダンス作品の創作過程についての研究は、課題による身体の変質や舞踊学習者間のコミュニケーション等について継続的に行われている。従来の研究は研究主体が、研究対象である舞踊家、振付師、舞踊学習者などを客体として観察・分析することが多かった。本研究では振付師として第一人称で語り、創作過程における振付師とダンサーのコミュニケーションによる動きの質の変化について実践事例を基に検討する。

共通言語と言われる Laban Movement Analysis/Bartenieff Fundamentals (LMA/BF)を作品の創作プロセスにおいて動きの質を捉える枠組として設定した。

3. 本研究の対象と方法

筆者が香港の C 舞踊団ダンスセンターを主催して学校巡回公演で振付したプロダンサー3人を対象とした。筆者は研究者として振付師である自分自身とダンサー（研究対象）との相互作用を観察した。稽古ビデオ、対話記録、ダンサーの振り返りを通じて外部観察した。また、振付師と同一の、研究者として筆者を内部観察して得られた一次情報と、それらの関係を明らかにしようと試みた。

4. 結果及び考察

4.1 ダンサー3人の比較

本実践調査では第二段階の「コンセプトを実践する」過程で、ダンサー3人が同じエクササイズ（身体視点の骨格のコネクション）を体験した。その後体験したコンセプトを意識しながら即興を行った。その結果、同じエクササイズを体験しても、ダンサー3人の動きの質に明らかに差があることが分かった。以下の表1に創作プロセスの第二段階の1日目に行った即興、ダンサー3人の比較を示す。

表1 第二段階の1日目に行った即興についてダンサー3人の比較

ダンサー/視点	身体	エフォート	形・型	空間
A				水平面 (図2)
B	動きのシークエンス (同時連続) (図3)	留まらない流れ、軽い重量		
C	動きの発達パターン (上/下半身の相同性) (図4)	コントロールされた流れ、一点集中空間		



4.2 個人的な変化

創作プロセスが進み、即興と対話を重ね、ダンサー3人が体験して各自が選択したコンセプトを使い、モチーフと動きのイメージを探り、構成を決めた。その結果、ダンサー3人の動きの質に前の段階と比べ、それぞれ異なる変化が見えた。(以下字数の都合上ダンサーAのみ掲載。) ダンサーAは第二段階と比べ、空間視点の Spatial Tension の Peripheral Tension (図5)と垂直次元 (図6)も見えるようになった。



5. まとめにかえて

創作プロセスの中でエクササイズを通して「動きの対極的な質」を体験し、体験したコンセプトを意識しつつ、対話と即興を通じて、予想していなかった動きの質が発見できた。今後俯瞰的な視点から本研究の全体像を把握して分析を続ける。